

討論の部

慶應（岡本） お二方、プレゼンテーションお疲れさまでした。中国側のプレゼンテーションは、文化面を強調して、東アジアには根底には共通の文化があるということで、これからの地域協力というものを理想的な観点からお話ししていたと思います。対して日本側は、目の前にある現実的な地域協力に関してお話ししてきたのですが、実際に中国の方は、日本とどのような関係をこれから結んでいきたいとお思いなのかお聞かせ下さい。

復旦（陳） 中日関係には、まず協力を行える基礎が必要だと思います。この基礎とは政治と経済の共同利益です。しかし、これを可能にする基礎も必要です。その具体例として中東問題が挙げられます。イスラエルとアラブ国家は政治・経済において協力し合える利益関係をもっています。しかし、どうしてイスラエルはアラブの国々の間、とくにパレスチナとの間で鋭い衝突があるのでしょうか？その理由は、政治及び経済の協力の可能性を欠いているからではありません。その理由は、文化の面で鋭い対立があるからです。

中東問題に比べると、日中というのは政治・経済でも共通の利益を数多く持っています。現実的に協力できる可能性を持っています。しかしながら、重要な問題が一つあります。それは、相互信頼が足りないことです。特に日本側の学生は発表の中で、具体的で客観的なデータを数多く挙げられました。特に軍事費の増大やその額などは非常に詳細に述べられました。しかし、それらは強烈な中国脅威論の色彩を帯びています。一方で、中国側もデータを持っています。そしてそのデータは、日本側のものとはかなり違っています。日本のメディアや学生からは、中国に対する懸念が表明されることが多いのですが、翻っ

て、我々中国側も日本に対して懸念を抱いているのです。

日本側が最も現実的な協力枠組みを作るには、やはり心理的相互不信感を解消していくべきだと思います。ポスト現代主義の国際関係の観点を挙げますと、冷戦期のソビエトとアメリカとの間にあった警戒感は観念から生まれるものであり、現実には存在しませんでした。日本と中国の間に完全に衝突がないわけではないのですが、やはり相互信頼感を欠いていることが、最も現実的な問題であり、解決すべき問題であります。もし両国が強く鋭い対立的民族主義感情を持っていたなら、いかなる現実的協力も不可能となります。ですから、日中の文化の親近性は、協力の基礎となり、凝集力になります。

復旦A 鷹箸さんに質問したいと思います。鷹箸さんは、日米安保条約、及び中国のすべきこと、すべきではないことについて色々おっしゃいましたが、アジア地域協力をする上で、発表されたような行為は、単に中国だけの責任ではないと思います。このアジア地域の協力を実現するために、日本はどのような責任をとるべきなのでしょう。また、日本がすべきでないことは何でしょうか。

慶應（鷹箸） 東アジアの地域協力において日米中が果たす役割の中でまず何が重要かということ、地域の安定と繁栄が大事だということ念頭に考えた時に、現状で日本側が中国に対してもっている懸念というのが・・・日本が責任を負う、負わないというよりも、まず現在の状況では、信頼関係を築かなければなりません。不信感を払拭しなければならないということで、国際法上、中国側が日本の政府との約束をやぶる形になったことで私達が持った不信感をまず払拭しなければなら

いと・・・

慶應（岡本） 質問は、「日本のすべきことすべきでないことは何なのか」ということだと受けとめていいんですよね？日本が地域協力に関してすべきことは、プレゼンの中ではっきりと繰り返し言ったと思うのですが、日本は地域の繁栄と安定を目指している。そのために地域協力を外交の中心に据えているということ。故に日本は地域協力を促進するために、レジユメの最初の方に書いてありますが、これは本当に例なのですが、こういったことをやってきています。すべきでないことは日本にないのか、という質問なのですが、地域協力をさらに促進するということが日本のべきことであると考えています。私達がプレゼンの中で懸念として表明したことというのは、中国にこういうことをすべきであると示したのではないんですね。

復旦A 私は、アジア地域の協力の問題に関して、日本が何をすべきであり、また今まですべきでないことをしてきたのかどうかについてお聞きしたいのですが。

慶應（岡本） 「すべきでないこと」を、もう少し範囲の規定をしていただかないと、「すべきでないことをしましたか」と言われると「いや、ないよ」という答えになります。繰り返し主張しておきたいのは、私達がここで懸念という風に表明したことは、中国脅威論をおおろうとしたわけではなくて、中国は大国であるからという前提のもとに、このような期待があるから、こういった行動をとると不審を持ちますよということを伝えたかったのです。

復旦B 中国脅威論とか責任大国の話ではなくて、気軽な質問をさせていただきます。日本の製造業は中国に大量の投資を行ってきました。生産拠点多数多く中国に移ってきました。本日ご在席の皆さんの中には、3、4年生の方が多くおられます。小島先生の学生は非常に優秀ですから、就職には問題はないでしょう。一般的には、学生の就職率は楽

観的ではなく、就職難の問題があります。日本の製造業の中国移転についてどう思われますか？

失業したらどうしますか？

慶應（原川）素晴らしい質問だと思ったのですが、今回の発表との関係がなかったので、明日の討論会にまわしたいと思います。

慶應（大津）中国側の発表は、文化の共通というのを構築すれば、相互不信やその仕組みがそこから作れるのではないか。その前提として共通の文化を大事にしようという話だったと思います。しかし、先ほどの「日本がすべきでないこと」というのに関連して、信頼醸成のかけには、きまりごとを重視することだとか、不審な動きをせずに相手にディスクロージャーしていくことだとか、本当の信頼構築のためにはそういうことが大事になると思います。

今日のこちら側のプレゼンテーションに即して言いますと、調査船という問題がありまして、今年の二月に、事前に目的だとか期間だとか、お互いが相手国に通報して調査を行いましょうという話があったんです。要するにそれを決めたということなのですが、本年すでもう5件もの中国側の違反が発生しているということで、中国側の不誠実な対応が目立っています。また、国防白書の不透明さがまだ抜けていないということがあります。こういった中国の状況、つまり不透明であるとか、真偽にもとるという状況に関してみなさんはどう思っているのかということと、中国政府はどうすべきであると考えているのかについてお聞きしたいと思います。

復旦C 海洋調査船の事件に関して、いくつか述べさせていただきます。まず一点目は、この調査船の事件の発生は、日本の中国に対する不信感の表れではないかと受けとめています。こういったことは、かなり前からすでに起こっていることです。日本から飛び立った軍用機や日本の港から出航した軍用船は、長年中国の沿海で情報収集活動を行って

いました。しかし、中国のメディアはこのことを集中的に報道していません。やはり、安定した、友好的な日中関係という角度から見れば、このような小さなことを大きく文章化して誇張すべきでないと考えています。

続けて二点のことを述べたいと思います。中日関係について一点ありますが、まず先程のお二人の発表に関して私の意見を述べさせていただきます。中日文化の差異についてです。中日文化の関係を議論する場合、我々が注目すべきなのは、その同源性ではなく差異だと思えます。少なくとも国際政治の分野においては、日本は西側の文化の強烈な影響を受けています。国際政治を考える上でも日本は、世界というのは無政府状態であると考えていて、実力によって国家の序列が定まる、というのが日本の国際政治の認識ではあるように見受けられます。これは中国の考え方は違っています。文化の相違点をなおざりにしたまま、中日関係を発展させようとするれば、多くの誤解があるため、中日関係が道を誤りかねず、我々が期待しているように安定的に中日関係の発展させることは難しくなります。

二点目は日米同盟の東アジア地域における地位と役割についてです。私は日米同盟というのは東アジアを安定要素ではなく、むしろ不安定要素だと考えています。それは同盟の特徴に起因しています。日本側の学生は、日米同盟は明確な潜在的対象がいるわけではないと強調していましたが、同盟の存在自体が脅威を与えます。同盟自体が、つまり敵国を想定しているものであり、日本側の発表では、明確にその脅威が存在するとは述べられていませんでしたが、そもそもその同盟の存在自体が他国になんらかの懸念を抱かせています。つまり日本とアメリカというのは、軍事力が強大な国であって、この同盟が、強大な力を濫用しないとは保証できません。これは、ほとんど実現が不可能ですが、本当にこの東アジアの安定を考えるのなら、この日米同盟は解消して、もっとオープンな多国間の協力

枠組みを作るべきです。もちろん、近い将来アメリカはそうしないだろうし、日本政府も同じでしょうが。これは将来的な解決方法だと思います。

復旦(陳) 彼に対する意見に先に答えさせて下さい。日本はやはり西側の国際政治理論に深く影響を受け、現実主義の色彩を帯びています。豊臣秀吉が16世紀に朝鮮を侵略してから、日本は東アジアから遠ざかるうとしていました。中国の文化は違っていて、中国の伝統文化は協調を基調としている。『論語』の中に「礼は友であり、和を持って貴しとなす」という考え方があります。しかし、「和」というのは、完全な一致を見るのではなく、「和して同ぜず」ということを強調しています。つまり「和」の最大の包容の下で、その中の一部の差異の存在を認めることです。中国の宋の時代の哲学者が、「仇は必ず和によって解ける」という言葉を残しています。すなわち、仇は必ず最終的にはなくなるのです。また、現代のある学者は、西側の観点からすれば、この言葉は「仇は徹底的に仇で返す」と言い換えられるべきだといっています。しかしながら、中日文化の立場からいいますと、私は中日文化の間に存在する差異を重要視していないわけではない。私が強調しているのは、こういった文化の違いは、共に努力し、共に歩むという前提の下で解決できるということです。

慶應(小幡) 「小さいこと」とおっしゃったんですが、むしろ小さいことの積み重ねということが大事だと思います。というのは、日本は地域協力の促進と言うことを言っているのですが、中国側は、例えば ARF での取り組みには法的な根拠が無いと言ってしまったりしています。米軍飛行機の海南島の問題でも、衝突した場所が国際法上でみるとあやふやなものがある、排他的経済水域内ではあるけれど、領海・領空内であるかということとははっきりと言えないと思います。小さな小さなことでも、それが重なって各国との関係が出

来ていくので、小さなことは大切だと思います。

それともう一点、日米同盟を初めとする同盟関係が、周辺諸国に対する不安定さを増していると言う意見でしたが、そうではなくて、周辺諸国は同盟関係があることによって得られる安心感を望んでいるところがあると思います。同盟関係がもたらす効果として、同盟関係がシェアされることで周辺諸国に安心感が生まれて、自分たちで軍事力を整備しなくてすむ、軍拡をせずすむ、これが「戦略関係の一定化」ということです。安心感が生まれることで、日米安保が多国間協力を促進していく効果が有ると思います。というのは、紛争中の地域でどこか一つの国が勝手に一方的な行動を起こせなくなる。だから、多国間協調枠組で解決せざるを得なくなる。

復旦D 先ほど、日米安保は地域の安定に役立つということを日本の学生は強調されていましたが、これには前提があると思います。まず、地域にある全ての国は、日米同盟に含まれていなければなりません。もし、日米同盟が、地域のある国を仮想敵国としたら、あるいは、ある国が日米同盟に含まれていないとすれば、どうやって日米同盟は地域に良い影響を与えていけるのでしょうか？

日本側の発表は、中国が責任のある大国として、すべきでないことをした、と強調していましたが、しかし、ここで私が強調したいのは、中国は、責任大国として数多くのすべきことをしてきました。例えば、東南アジア金融危機のとき、中国の行為はこの地域の安定に大きな役割を果たしました。これが二点目です。

そして、先ほど日本側の発表者が発表した文章で、中国の問題をたくさん指摘しましたが、なんだか、中国を批判しているような印象を与えられました。ですが、日本側は、日本に存在する問題について言っていない。中国は、いろいろと周辺諸国を心配させる行為をしてきたといいますが、日本も周辺諸国

を心配させる行為をしてきたのではないのでしょうか。例えば、日本は歴史に対する態度で、「日本は信じられない国」というイメージを与えました。また、日本の軍隊も年々拡大して、日本の自衛隊の海外派遣の問題もあるのではないのでしょうか。これはすべて信頼できないものです。ですから、もし信頼感と言ったら、そのお互いの信頼感はそのものですから、ただ単に中国を批判するだけではいけません。慶應（鷹箸）私たちは、ただ単に中国を批判したわけではありません。それというのも、日本は自衛隊を海外に派遣しているということをおっしゃっていましたが、日本の国家理念には三つあるのですけど、平和主義と、国民主権と、基本的人権の尊重と言うのがあって、日米安保もその三つの理念に基づいて出したものです。その相互の信頼を気付くためには、正確な情報をお互いに明らかにして、「小さなことにこだわらず」と中国側はおっしゃっていましたが、そういうことを一つ一つ明らかにして解決していくことが相互信頼につながるのではないかと思います。

復旦E 鷹箸さんに対して二点お聞きしたい。まず、日米安保は平和主義に基づいて作られているといいますが、これは日本とアメリカのアジア太平洋地域における安全保障上の利益に基づいたものであり、アジア太平洋地域全体の平和主義に基づいたものではありません。先ほどの発表の中で、中国は沿海に軍隊を配備していると言っていました。一方で、アメリカ軍が日本の各地に軍隊を配備しているのではないですか。我々が日本を攻撃しようと企んでいると言われましたが、アメリカと日本が協力して我々を攻撃しようとしていると言えないわけではないでしょう。中国に「風の吹かないところに波は立たない」という言葉があります。あなた達は中国が中日両国の友情を傷つける行為をしてきたと言っていますが、私は日本が中国及びアジアの国々の反対を無視して、非常に残念なことをしていたと思います。

例えば、小泉総理が靖国神社に参拝したことはその一つです。小泉総理の靖国神社参拝が中日両国の友情のみならず、アジアの他の国々もこのことに対し非常に強烈な反応をしめています。ところで、仮にアメリカが日本の首相に対して靖国神社に参拝するなどといったきたらどうするのか。これをお聞きしたいと思います。日本が、アジアならびに中国に一種の優越感を持っているから、中国やアジアの国々の行為を批判しているのではないのでしょうか？

慶應 A いろいろな日本人の意見聞けるのがいいと思うのですが、先ほどから言いたいことがあったので、一点だけ質問したいことがあるのですが、よろしいでしょうか。

司会 もう時間がないので、明日の総合討論の中をお願いします。

慶應（小野）今質問があったので、これに対して簡単に答えたいと思います。今のご質問、最後の方、日米安保、靖国神社、日本が優越感を持っているんじゃないか、という話だっ

たのですが、日米安保はちょっと長くなるので、最後の二点に関してお答えしたいと思います。

もしアメリカが靖国神社を参拝すると言ったら、日本側はどうするかとのことでしたが、私自身は、日本側はアメリカが何と言おうと靖国神社を参拝したのではないかと思います。その細部については明日またお話ししたいと思います。

また日本が優越感を抱いているのではないかというお話でしたが、これが優越感に当たるかどうかは分かりませんが、日本は間違いなく、経済大国であるという自覚は持っています。またその自覚と言うものを今後東アジアの地域協力の中で、どう活かしていったらいいのか、日本はどのような役割を果たしていけばいいのかということについては、真剣に日本は考えていると言って良いと思います。

司会 もう時間ですから、午前中の議論はこれで終わります。

---

（編集注）発言者名は、論文報告者（慶応側は共同執筆者も含む）のみ実名で記載し、論文報告者以外は原則として記号で表してあります。以下の討論部分の扱いも同様です。